

ミニ・シンポジウム

「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在—

『水田文庫貴重書目録補遺;水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」趣旨説明

Purpose of the symposium “Present stage of Descriptive Bibliography and archival research on Western rare books”

このミニ・シンポジウムは、タイトルにもありますように、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究（B）「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書・手稿・デジタル資料を総合した18世紀研究」（研究代表者：一橋大学・小関武史教授、研究課題番号：19H01200）研究グループの活動の一環として開催いたしました。

日本でも和文献を中心に、デジタル・ヒューマニティという視点から、デジタル時代の新しい資料研究法が開発されています。それら和文献資料は日本独自の資料ですが、西洋古典籍、特に近代思想に関する古典籍に関しても、日本はおそらく東アジアでも有数のコレクションを持っている国といえます。もちろん西洋近代思想史の資料の大半は外国の貴重図書室で調査できるわけですが、日本にしか存在しないものも含め、この分野の多くの優れた資料が、一橋大学を中心に名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学などの図書館に所蔵されています。我々の研究会は、外国の先行研究やデジタル資料も使いつつ、日本に所蔵される西洋の近代思想史に関わる古典的な資料を発見・再検討し、研究方法を開発しつつ、西洋近代思想史に関する新しい視角や、あるいは思想の多様性を見出していくことをテーマにしています。なおこの研究会メンバーの多くは日本18世紀学会に属する啓蒙研究者ですので、18世紀に関する思想史研究の現段階については、現在本学会が編集し、2022年秋以後出版予定である『啓蒙思想の事典（仮題）』を読んでいただければ、全体像を見ていただけます。

このような新しい研究にあたって重要なのは、研究者とライブラリアンの方々との協力であろうと思います。とりわけて我々が注目しているのは、刊本や草稿を中心としたモノとしての資料、デジタル化する前の資料をどう見ていくのかということです。デジタル的な情報は原資料を人間がデジタルした結果ですので、そこでスクリーニングされています。しかしモノとしての資料はあくまでも個物としてのモノであり、全てがデジタル化できるわけではありません。それらは実はデジタル化から零れ落ちた様々な情報を持っています。研究でのそれらの活用の仕方を探求し、さらにはそれらをさらに整理し、デジタル的な形に変換していくことなどで、どのような新しい研究の方向性が出てくるのかが、この研究グループの関心のひとつであります。そのような意味で、ライブラリアンの方々と研究者とが協力し、お互いにいろいろな知恵を出し合って、資料整理の仕方、特に図書館が持っているモノの研究、整理、そして情報をそこからどうやって取り出すのかを研究する必要があるかと思っています。

この研究会ではすでに一度、対面の形で、一橋大学社会科学古典資料センターのご協力を得てシンポジウム「書物の記述・世界の記述 一書誌が描く18世紀啓蒙の世界」（2019年12月

20日開催、於一橋大学佐野書院)を開催しておりますが、今回は遠隔方式での開催となりました。名古屋大学附属図書館は水田文庫、ホップズ・コレクションを中心に貴重な資料を所蔵しております。同図書館にはこれらを単に管理・保蔵するだけでなく、整理するにあたって、古典文献資料の整理の仕方、カタログ化、そしてどのように情報をうまく収集すれば研究等に役立つのかを検討してきた蓄積がございます。本日の講演は長年にわたって資料の調査をされた高野先生、中井さんをお招きして、これに関する現在のひとつの到達点を、名古屋大学附属図書館の資料を中心に明らかにしたい、というのが本日の趣旨でございます。

現在大学図書館は非常に厳しい財政的状況下にあります。その中でも今まで先輩方が開拓してきた資料整理の方法、公開の方法、そういったものを受け継ぎながら共有し、できれば少しでも発展させていくことが、現在の我々研究者やライブラリアンの方々にとって重要なことであるかと思えます。そのような機会の一つとして、一橋大学社会科学古典資料センターのご協力をいただき、本日のシンポジウムを開催する運びとなりました。

今後も図書館や大学を巡って厳しい状況が続くことが予想され、楽観的なことは言えませんが、しかしその中でモノとしての資料の重要性とその整理の仕方、そしてそれをデジタルに結びつけていくという大切な方法の探求を続けていかなければならないですし、そのためには、一図書館だけではなかなか困難ですので、われわれの研究会が研究者も含めライブラリアンの方々が協力していく一つのハブとなることができれば、このようなシンポジウムを開催することには価値があるのではないかと考えております。今後もこのような会合を継続開催していければと考えておりますので、本日参加していただいた方々には、是非今度とも我々と交流しつつ、モノとしての資料、特に我々は西洋ではありますが、図書館が持っているモノとしての資料をどう整理し、どう使い、デジタルの時代にどう生かすのかを探求する作業をご一緒できればと考えております。

長尾 伸一

Shinichi NAGAO

※本研究は JSPS 科研費 JP19H01200 の助成を受けたものです。

※なお、本シンポジウムでの松波報告「『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書所収』編集後記」については、以下の内容がベースとなっております。ご関心のある方はぜひご覧下さい。

中井えり子・松波京子「『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書目録所収』編集後記」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第19号、2022年3月発行、pp.37-51.

<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/2002340#.YnnHGOjP3Vg>